



けんこう処方箋

北海道家庭医療学センター理事長 草場 鉄周

町医者 の 存在 見 つ め 直 す と き

イラスト・佐藤博美



「家庭医療」という言葉から、皆さんは何を思い浮かべるだろうか？「家庭の医学」「家族問題を扱う医療」……。言葉通りに受け取ると、やや勘違いする。まずは、昔ながらの「町医者」を思い浮かべていただければ十分である。

町医者は、子ども・大人の区別なく、心臓だ、肺だとも分けずに様々な病気を診察し、請われれば患者さんの家に往診し、必要ならば夜でも診療所を開けて診察していただく。多くは町の名士で、役場にも顔が利き、住民の健康にも大きな関心を持って発言していた。家庭医療とはまさにこうした医師＝家庭医が提供する医療にはかならない。

40年代まで当たり前だったが、病院を中心とした専門医療の発達に伴って次第に姿を消し、今や珍しい存在になってしまった。

住民側もまた、病院の専門診療科をはじめとする受診スタイルが当たり前となった。いま、一人ひとりが、その人の性格、家庭環境、職場まで見据えて、地域で多様なケアを継続的に受けるのはかなり難しい。

超高齢化社会を迎え、多くの疾患を抱える高齢者を対象にした医療の拡大、検査や治療の細分化、医療・介護制度の複雑化……。家庭医不在の悪影響は顕在化しつつある。

こうした反省に立ち、かつて日本の医療の土台を支えてきた町医者の存在をも一度見直すべき、住民の日常の健康問題を幅広く継続的にカバーして地域全体を診る。そうした視点を持つ医師とその医療を明確に定義づけるため、家庭医療という分野が生まれた。昭和の終わりのことだ。現代医療の行き過ぎた専門分化と細分化に対する対照的な位置づけでもある。

私が歩んだ山あり谷ありの道のりを連載で紹介しながら、家庭医療の視点から、日本の医療制度が持つ様々な問題点について、皆さんの理解を深めていただく機会になればと思う。

くさば・てつしゅう 1974年福岡県生まれ。99年京都大学医学部卒業、家庭医を志して北海道へ。日鋼記念病院（室蘭市）や道内外で研修を積み、2003年から北海道家庭医療学センターに勤務。08年、センターが医療法人となるのに伴い、理事長に就任し、診療、家庭医の育成、派遣にあたる。日本プライマリ・ケア連合学会副理事長。